

親潮レース参戦レポート (KAYA 編)

MORC 最大の外洋ヨットレース、今年は我々の姿がカレンダーになるに違いないと思って、帽子は揃えるわ、早坂君に頼んでTシャツは作るわと張り切っていたのですが、はっと気がついたら、金さんとダブルハンドで親潮北上レースに出ることになってました。でも風は弱い予報だし、スピシなら冬に二人であげてたから大丈夫。それに今回は秘策がある。二人でも優勝できるぞ。

吹かれたら我々に勝機はありませんので、「か～ぜかせ吹くな。」と、いやしくもヨット乗りにあるまじき呪文を唱えながらスタートします。何度か無風で艇団が止まりますが、田代島付近まではともかく首位をキープ。網を安全にかわしたつもりだったのですが、かなり前から、網ギリギリに狙いを付けていたエスポアールにじりじりと抜かれてしまいました。

砥面と網地島の間を抜け、なんとか来ましたが、後ろからどんどん嵯峨が近づいてきます。お前のようなレーティングの船などに負けるか～と、湯気が立って見えます。銀河だけが田代の北を回って、かなり差を詰めて追いつがります。先行のエスポアールも少し細かいタックをして黒崎を回っているようです。我々も黒崎ぎりぎりを回る作戦でしたが、回ってみると、エスポが止まっているのです。喜んで追いついたのですが、当然のことながら我々も止まってしまいました。

ここで先行2艇を見た嵯峨の決断は早かった。我々には近づかず、水道を一気にわたって金華山ぎりぎりにつけて、そのままスピシを上げて行ってしまったのです。一向に減速する様子はありません。おかしいな、東の風だから、金華山に近づけばブラケットになるはずなのに、それと反対にできるだけ離れた牡鹿半島よりで無風とは。あの判断は年の功かはたまた普段の金華山信仰のご利益か。脱帽です。

しかし金さん、我に秘策あり。銀ザケの網の陸側を強行突破して最短距離を行くのだ～。これはさる6月に金華山カップでドットレッサが採用してかなりゲインした奇策です。航跡図をご参照ください。これを分析した艇長なら皆この可能性について検討したはずです。これは私にとってはハレニバルやナポレオンのアルプス越え、一の谷の鶴越（ひよどりごえ）に匹敵する作戦であり、乾坤一擲起死回生の一手だったのです。しかし、現実は無惨に私の構想を打ち破り、全く艇は進まず、これまでのリードは水の泡、後続の全艇に追いつかれてしまったのでした。「あのう、我々も水道を渡った方がいいのでは。」とおそ

るおそる金さんが口を開きます。おそらく児玉源太郎に戦略の変更を提案された乃木將軍の心境もこうだったでしょう。金さんが『喪失感』と呼んだ感情を私も味わいながら、無風を必死にもがいて水道横断を敢行しました。金筆山を抜けたあたりでは、上位2艇は先に行って、下位4艇が並んでいました。

ここで独創性の塊、銀河が本領を發揮します。リアス海岸をなめるようにぎりぎり岸寄りにコースを取ったのです。さしもの巨艦も小さく見えるほどのフィヨルドクルーズのような雄大な景色は私の網膜に美しく残っております。美しいだけでなく、銀河はここでほかを引き離し、先行して行きました。KAYAはといえば、ベイシュベル、アセーナに追いまくられ、必死で風道を探します。この努力にたいし、勝利の女神が、(なぜ女性なのかはさておきまして) 2度目のチャンスくれたのです。

まずオレンジの巨大なスピンを上げて先行する銀河が、がくっと折れ曲がって我々の前から去って行きました。次にベイシュベルが、どんどん沖へ行ってしまいました。アセーナも遅れてゆき、そして、何と先行する嵯峨とエスポがだんだん大きく見えてきたのです。私と金さんは信じられない思いでスピンを操っていました。KAYAは、7ノットくらいで快走しています。岸べたのエスポを抜き去り、沖の嵯峨に追いつき、美しい夕暮れを迎えます。

この速度ならゴールして寿司屋も夢ではない。そう思った瞬間、勝利の女神は我々を見放したようです。

「先生、風が前です。ジブに替えましょう。」はっと我に帰った私は、周りを見回して、「よし行こう。」ジブをあげると、あれ、やっぱり後ろだね。またスピンを上げよう。で、下ろしたジブが海に落ちてしまい、引き上げるのに大変な力を必要としていますが私は前に助けに行く訳に行きません。やっこのことで回収し終わってみると、嵯峨は遙か前方で夕闇に消えてゆき、2挺身後ろにはアセーナが迫っています。もう小泉湾にさしかかり、これをすぎればゴールです。スピンジャイブを繰り返して追いかける我々の頭上に、あまりにも美しい星空が輝きます。前方に航海灯が見え、ミートしそうになって金さんと私のかげ声もひそひそ話になってしまいます。お互いにはなれて、こちらは小泉湾に入ってしまった。これが最終的に敗因となりました。全く吹かなくなってしまう、また、ジャイブで出したメインシートが、外れて行ってしまい、ブロック、テークル(いずれも滑車のことです)がバラバラになってしまって、私は片手に舵、もう一方にメインシートを直につかみ、顔は天を仰いで(風見

を見るため) 仁王立ちになって KAYA を動かしていました。ついにスピルが提灯になってしまい、なかなか外れなくなりました。「メインだけで走るから、ポール下ろしてくれ。」再びあの喪失感が戻ってきました。ところがこのときになって、風が前からほんとに吹きだしたのです。破けはしたもののスピルを下ろし、ジブをあげると5.4ノットで走り出しました。ゴール30分前にレース委員会に連絡することになっていきますから、ゴールから2.7マイルの所で、勇躍携帯に叫びます。「もうすぐですよ。よろしくお願いしますね。ね。ね。ね。」「はいはい。まあがんばってね。」

前方に航海灯が見えますから、嵯峨に違いありません。「よし、ファーストホームは無理でもこれなら総合優勝はこっちのもんだ。」

これが如何に愚かな考えであるか、思い知るのはそう先の話ではありませんでした。気仙沼港の緑の進入ブイから、ぱったりと再び無風になったのです。ゴールのラインを構成する岩井崎灯台も、大島南灯台も左右真横に見えます。しかし、艇行かず艇行かず、KAYA 行かざるを如何にせん。右にタックすれば龍舞崎の網、左にタックすれば、海流で流され、岩井崎の岩礁方面へ逆走。タックできるのが不思議なくらいのベタ風の中を、のたうち回っていました。

「もしもし。もうゴールしてませんか?」「まだしてません。」「ほんとに見えてますか?」「はっきりくっきり見えてますよ。いい加減にして早ようゴールしてくれないと一時間半前から眠れないんだよね。こっちも。」「。。。。」ようやくレース委員会にゴールを認めてもらったのが、午前2時半。しかもそのあとももらった知らせが、前方の航海灯は、嵯峨ではなく、何とアセーナだったこと。

完敗です、カンパーイ。それにしてもまだまだ修行が足りないなあ。銀河などは岸を行くと決めたら絶対行く。朝6時にゴールするまでその方針を貫き通し、その間、流星をいくつ発見するか楽しみにしてたそうです。同じ人生を帆走するのでも、こちらは少し調子の良いのに舞い上がり、寿司だの何だのと現世の欲に目がくらみ、空を見ても風見しか目に入らず、「星に願いを」のようなロマンチックな考えなど露ほども抱かず。

それにしてもアセーナはすごいなあ。終盤までずっと最下位だったんですよ。ひよっとしたら勝利の女神ははじめからアセーナに乗っていたのかも。

今回は、全艇が見わたせるレースでした。今年は座間味ヨットレース、青函

ヨットレースと見学してきましたが、このレースが最も過酷です。胸を張って「ザ、レース」といえるのではないのでしょうか。戦いの間の各艇の思惑をぜひ知りたいものです。KAYA は、図上の作戦にこだわらず、目の前の風を素直に判断してればよかったです。反省して禅寺にでも行って来年はスキンヘッドで出ようか知らん。

2007.08.16 KAYA 赤石艇長